

ID (インテリジェント・デザイン) と統一思想

渡辺久義

渡辺久義・原田 正著『ダーウィニズム 150 年の偽装——唯物論文化の崩壊と ID (インテリジェント・デザイン) 科学革命』(アートヴィレッジ、2009 年 9 月刊行予定) よりの抜粋

現在我々が持つ最高の仮説としての「統一思想」

我々はダーウィニズムのような唯物論的な世界解釈が、いかに不合理で、不健全で、かつ破壊的な、しかも現実をねじ曲げて意に従わせようとする、学問から離れた動機をもつものであるかを見てきた。もしこのようなものが学問の世界や一般社会の指導原理として君臨するならば、人間は個人としても集団としても、内面的にも外面的にも、すべてが「非人間化」され破壊されることは火を見るより明らかである。

私たち著者のそもそもの動機は、序章に述べたように、今明らかに世界の思想界の底流部で進行中の真の意味での文化大革命を、どう評価し方向付けるかということにある。まず、近代科学がその成功の勢いに乗って退け、今日までタブーとしてきた目的論的世界観が、否も応もなく見直されなければならなくなったのは確かであろう。これは、宇宙の微調整や自然環境のデザインの事実を誰も否定できない以上、少なくとも頭から否定することはできない。しかもその目的が単に生命でなく人間にあることも、認めざるを得ないだろう。

ではアリストテレスをそのまま復活させればよいかと言えば、もちろんそうではない。ただアリストテレスの「形相因」と「目的因」(一緒にして青写真と考えてよい、自然界ではともに無形要因)を「質料因」と「作用因」(ともに有形の物的要因)に対置させた「形相・質料二元論」、すなわち精神(心)と物質(身体)の二元論としての自然解釈は、おおまかな形としては復活させるべきであろう。少なくとも、「心」あるいは「デザイン」といったものの働きを抜きにして宇宙自然界を解釈しても、いわばゴリ押しの馬鹿げた解釈になってしまうのは、これまで見てきた通りである。生命や心は確かに神秘的なものではある。しかし物質をうまく組み合わせるとそれが生き物になって、食べたり交尾したり考えたりするようになるというのは、怪奇現象であろう。神秘を否定して怪奇を取る、というのが唯物論ではないだろうか。しかしともかくありていに言って、科学も哲学も行き詰まって打開策を見出せないでいるというのが現状であろう。

そこで私たちは「統一思想」と呼ばれる韓国で生まれた、きわめて有効な哲学体系を開発策として提案しようと思う。これは特定の宗教が背後にあるということがあって、今のところ知る人は限られている。というよりこれは、アメリカで ID 理論がこれまで受けて

きた扱いと同じく、知らないことが美德になっていると言ってよいであろう。読まないで、また知ろうともしないで、ただ時流に従って軽蔑することが奨励されるなら、怠惰な人間にはこれほど有り難いことはない。しかし I D についても、統一思想についても、その態度をいつまでも押し通すことはできなくなったと言ってよい。

統一思想の全容を紹介することはもちろんできないが、まずこれは単に世界を解釈するのではなく、世界を改革するための哲学である。この点で、それはマルクスが自分の哲学について言ったことに似ているが、マルクスとは正反対の根本動機と方法によるものである。マルクスにおいては闘争の哲学がその根底にあるが、統一思想の根底にあるのは「愛」である。統一思想は、この宇宙は愛を動機として創られたと教える。すべてがそこから発し、現実問題の解決はその原点を振り返ることによって可能となる。何度も言ったように、宇宙は一つの生命体であるが、統一思想に従ってこれを捉えなおせば、宇宙は愛に支えられて存在する。

我々の当面の課題である生命起源の問題、「生命の本質とは何か」という問題も、その創造動機の問題から導かれて説明される。統一思想は、宇宙あるいは創造者が本来どのような基本構造をもつかということから始め、創造に至るきわめて精緻で合理的な説明を提供する。

これまで我々は、このような演繹的な説明を科学でないとして退けてきた。いま我々はその態度を貫けるほど、科学に自信もなく見通しもなく、不安の中に置かれているというのがありのままの現状である。科学自体が何か強力な支えを必要とするものであることに、我々は気づき始めたのである。何よりも科学——現在考えられているような科学——はこれまでの「没価値」神話を引きずって、人間が生きるための指導原理を提供できないではないか。のみならず、そういう批判をする者を追放さえするではないか。

統一思想と I D 理論は、まったく無関係に別々に現われたものだが、ともに現状打開の運動として同じ方向を指している。これはいわば歴史的必然と言うべきもので、一方は科学革命理論、他方は世直し（意識改革）のための哲学体系だが、期せずして相補的につながっていると言うことができる。実を言えば、統一思想の価値が本当にわかってきたのは I D の出現によってであり、逆に I D の発展する方向が、統一思想の方向であることを暗示する『意味に満ちた宇宙』のような本が書かれている。

統一思想は、創造主は宇宙を創るとき、最初に人間を目標として頭に描き、そこから逆算して素粒子や原子など最小の要素から鉱物、植物、動物、人間の順に創っていった（だから人間と宇宙万物に照応関係がある）と教えるが、これは人間を頭においた、人間を生み出すための宇宙の微調整という「人間原理」的事実に一致する。また、こうした統一思想の目的論的観点は、(かつてこれを受け付けなかった固い頭には)あまり現実味のない話とも思えたが、マイケル・デントンの『自然の運命』や、『特権的惑星』といった著書が現れることによって、にわかには現実味を帯びるようになった。また自然界の創造と人間の芸術創造を、単に比喻としてでなく、現実と同じ過程だとして説明するのも、統一思想と I

D (『意味に満ちた宇宙』) に共通である。そして何よりも、科学と宗教あるいは哲学を有機的に結びつける (統一する) のは、両者に共通する点である。ID がものの考え方をまず正しい軌道に乗せ、統一思想が正しい場所へ導いていくと言ってもよいだろう。

ID 理論の「デザイン」とは内包概念の豊かな言葉で、構想、計画、設計、意図、意志、目的、また情報といった概念をすべて含むが、ID はこれらを区別して考えてはいない。ID はただ「宇宙と生物の特徴のいくつかは知的原因 (すなわちデザイン) によって最もうまく説明される」としか言わない。これに対して統一思想では、構想、計画、設計、意図、意志、目的といった、新しくものを創ろうとするときの心の働きが精緻に弁別され、それらの関係が図式化される。そしてそれらが関係を結ぶ「主体と対象」「性相と形状」の「授受作用」という普遍的運動によって、世界が現実にも生み出されるまでの過程が、合理的に説明される。これは芸術創造と本質的に同じだから創造論は芸術論でもある。

こうした理論はもちろん科学ではないが、「科学を基礎付ける」つまり科学の使命や目的を教える科学だとは言える。こういった理論が正しいか否かを判断する基準はいくつかあると思われる——すなわち、いかに宇宙の根源に同化しようとする意欲から発しているか、少数の基本コンセプトが、いかにあらゆる現実の側面を統一的・整合的に把握するのに役立っているか、いかに新しいパラダイムとして有効であるか、すなわちいかに既存の理論や科学的事実を説明し、かつ新しい発見や理論の構築を導く (heuristic に働く) か、とりわけいかに現実問題解決の指導原理たりうるか、等々。統一思想は少なくとも現時点で、他に比較するものがない権威と力をもつ哲学体系だと思われる。

そこでここでは、我々のぶつかった二つの難問、すなわち生命起源の問題と、そもそも科学的発見がなぜ可能なのかという問題 (アインシュタインやユージーン・ウィグナーの提起した謎) について、統一思想がどう答えているかを調べてみることにする。

生命起源の問題に答える「統一思想」

統一思想の最も根本にある概念は「性相」と「形状」だと言ってよい。これは簡単に言えば心と身体、精神と物質であり、アリストテレスの形相と質料に相当するが、単なるアリストテレスの復活でないことは言うまでもない。これについて『新版・統一思想要綱 (頭翼思想)』はこう言う——

すべての被造物は、何よりもまず原相 [神の属性] に似た属性として性相と形状の二側面をもっている。性相は機能、性質などの見えない無形的な側面であり、形状は質料、構造、形態などの有形的な側面である⁽²⁰⁾。

生物が生まれる過程は、唯物論科学が考えるように、無生物が自力で自分を組み立てて生物になるのではない。その下からの組み立て、すなわちボトムアップの運動を指令する (導く) トップダウンの働きがなければならない (これが「デザイン」)。このボトムアッ

プの側面が有形的な「形状」であり、トップダウンの側面が無形的な「性相」である。統一思想はこれが「すべての被造物」つまり鉱物、植物から人間にいたるすべての存在の構造だと言う（生命起源を説明するだけではない）。

このこと自体は特に目新しいことではないと言ってもよい。アリストテレスの形相（*eidos*）は、一つの実体をそのものたらしめている本質であり、質料（*hylē*）はそれに形を与える素材である。しかし『要綱』自体がきちんと説明するように、それは次の点で統一思想とは根本的に異なっている——

アリストテレスによれば、形相と質料を究極にまでさかのぼると純粹形相（第一形相）と第一質料に達する。ここで純粹形相が神であるが、それは質料のない純粹な活動であり、思惟それ自体であるとされる。すなわちアリストテレスにおいて、神は純粹な思惟、または思惟の思惟（*noēsis noēseōs*）であった。ところで、第一質料は神から完全に独立していた。従ってアリストテレスの本体論は二元論であった。また第一質料を神から独立したものと見ている点で、その本体論は、神をすべての存在の創造主と見るキリスト教の神観とも異なっていた⁽²¹⁾。

このようにして、トマス・アクイナスやアウグスティヌスの神観も批判される。彼らは、神は一切の創造者であるが自分自身に質料的要素がないために、「無からの創造」を主張せざるをえなかったのだと言う。「しかし無から物質が生じるという教義は、宇宙がエネルギーから造られていると見る現代科学の立場からは、受け入れがたい主張である。」また、精神と物体は神に依存しながらも、完全に異質だとするデカルトの物心二元論も、問題を解決はしないと言う。

このように西洋思想がとらえた形相と質料、または精神と物質の概念には、説明の困難な問題があったのである。このような難点を解決したのが統一思想の性相と形状の概念、すなわち「本性相と本形状は同一なる本質的要素の二つの表現形態である」という理論である⁽²²⁾。

「本性相」「本形状」とは、神の属性として神に内在する性相と形状という意味であるが、この二つの性質は創造以前の状態では、神の内部に「調和的あるいは中和的に」一体として存在していた。それが被造世界では、二つの表現形態をとって現れたという。それはちょうど水蒸気と氷が、水の二つの表現形態であって別物ではないのと同じである——

同様に、神の性相と形状も、神の絶対属性すなわち同質的要素の二つの表現態なのである。絶対属性とはエネルギー的な心、あるいは心的なエネルギーのことである。つまりエネルギーと心は全く別のものでなく、本来は一つになっている。この絶対属性が創造

において分かれたのが、神の心としての性相と、神の体としての形状なのである。・・・被造世界において、性相と形状は精神と物質として、互いに異質的なものとして現れるが、そこにも共通の要素がある。・・・性相の中にも形状的要素があり、形状の中にも性相的要素があるのである。したがって、原相においては性相と形状は一つに統一されているのである。本質的に同一な絶対属性から性相と形状の差異が生じ、創造を通じてその属性が被造世界に現れるとき、異質な二つの要素となるのである⁽²³⁾。

生命起源の問題を考えると、(アリストテレス流の) 質料に向かって働きかける形相、ボトムアップの組み立てに対するトップダウンの導き、デザインされるものに対するデザインの働き、といった考え方がいずれも妥当であることを統一思想は保証する。しかしこの有形のものと無形のものが、もしデカルトが考えた物質と精神のように、まったく縁のない赤の他人同士であったら、どうして両者の和合一致が可能なのか、という問題が生ずるであろう。これに対して統一思想は、元々一つの根源から出た、したがって互いに相手の要素を持つ対立者(性相と形状)が結合する、という考え方を提示することによって解決を与えている。これは一元論とも二元論とも言えず「一元二性論」と呼ばれる。

しかもこの「働きかけ」「導き」といった作用は、性相が「主体」、形状が「対象」であって主導権は性相にあるのだが、一方的なものではない。両者の間で「授受作用」がなされると教える。これは「フィードとフィードバック」と言ってもよく、構想を立ててものを作るとき、特に、絵を描いたり詩を作ったり作曲したりしたことのある人なら、容易に実感できるであろう。画家にとって作品構成の素材となるものは色と線(あるいは絵具とキャンバス)であり、詩人にとって素材は言葉(と文法などの制約)であり、作曲家にとっては音(と音の規則、制約)だが、それらの素材は自分の思い通りになるものでなく、何度も「授受作用」すなわち素材との対話をくり返しながら、あるとき一気に作品が生命を得て出現する。芸術作品は必ず作者の「分身」でなければならない。作者が息を吹き込んだものでなければならない。自然界の作品もそういうものであろう。そして人間という創造者の最後の作品は、創造者の最高の分身であろう。レオナルド・ダ・ヴィンチは「モナリザ」が彼の最高の分身であったために、終生これを手放そうとしなかった。そのように創造者も我々人間を手放そうとしないであろう。

自然界では、多くの科学者が認めるように、炭素を中心とする酸素、水素、窒素などの基本的な生命構成のための元素あるいは水のような素材が、最初から生命を頭において——あるいは詩的に言えば「相手にバラを贈る恋人」を頭において——用意されたものであり、構想された作品と作品の素材がまさに「一元二性」の関係であるからこそ、生命創造が可能であったと考えるべきであろう。マイケル・デントンの言う通り、「時計の中のひとつひとつの歯車が、その役割のための唯一の、かつこれ以上ありえない適材」であったがために、時計の製造が可能だったのである。自然界の本質は、我々の観察経験する通りの調和であって、デカルトから始まってダーウィニスト・唯物論者が想定するような闘争では

ない。

最初の生命創造、あるいは新しい種の創造というものが、現実にはどのようにしてなされたのか、これをCG画像のように視覚化することはできないであろう。しかし原理的には、統一思想が教える緻密な創造過程を簡略化して言えば、「生命を与えられた構想」「生きた鋳型」である「性相」に、それを実現する素材である「形状」が入り込むことによってなされる。性相と形状の間に働く「授受作用」とは、受信（像）機と放送局の間の電波の同調（共鳴）のようなものである。もともと合うように造られた両者の波長が合ったときに、忽然とスクリーンに映像が現れるという現象と、生物種がダーウィニズムの要求する進化の前段階なしに、完成された姿で突如として登場するという事実には、共通したものがあるように思える。

科学者がDNAを合成することに成功し、そのことによって生命を造ることができるかのように一時、錯覚したことについて、統一思想は次のように言っている――

科学者がDNAを合成するという事は、果たして生命を造ることを意味するのであるか。統一思想から見れば、科学者がいくらDNAを合成したとしても、それは生命体の形状面を造ったにすぎない。生命のより根本的な要素は生命体の性相である。したがって科学者が造り得るのは、生命それ自体ではなく、生命を担うところの担荷体にすぎないのである。…

ラジオと音声について考えてみよう。ラジオは放送局から来る電波を捕らえて音波に変化させる装置にすぎない。したがって科学者がラジオを造ったとしても、科学者が音声を造ったわけではない。それと同じように、たとえ科学者がDNAを造ったとしても、それは生命を宿す装置を造ったにすぎないのであって、生命そのものを造ったとはいえないのである。

宇宙は生命が充満している生命の場であるが、それは神の性相に由来するものである。そこで生命を捕らえる装置さえあれば、生命がそこに現れるのである。その装置にあたるのがDNAという特殊な分子なのである。「性相と形状の階層的構造」から、そのような結論が導かれるのである⁽²⁴⁾。

DNA自体は物質であるが、DNAが担っているのは情報あるいは指令である。この二つは独立した別物で、物質を組み合わせればそこから情報や指令が湧き出すわけではない。唯物論者・ダーウィニストがこの迷妄から覚めるのに時間がかかったのだとすれば、それは唯物論科学体制というものが、いかに科学を遅滞させるかを物語るものである。

科学的発見がなぜ可能なのかに答える「統一認識論」

『統一思想要綱』には「存在論」「価値論」「教育論」「芸術論」「歴史論」などと並んで「認識論」という一章が設けられており、これは従来の認識論で説明できなかった問題を

解決するものとして「統一認識論」と名付けられている。そもそもなぜ認識が可能なのかということは解決済みの問題のようであるが、統一認識論を知れば、それが全く解決していなかったことがわかる。そして歴史上何度も提案された認識論の、何が問題だったのかがはっきりしてくる。例えば、懸案のアインシュタインの逆説——「この宇宙について最も理解できないことはそれが理解できることだ」——や、ユージーン・ウィグナーの「自然科学における数学の理不尽な有効性」の謎は、統一認識論でなければ解くことはできない。

しかもこの哲学体系が、根源的な宇宙構造の把握からくることによって、(発見的) 認識も新しい創造も、広い意味での世界の「発展」として、原理的に捉えられる。このことから生命起源や生物種創造の謎を解くヒントが、認識論からも与えられる。

なぜ純粋に主観的、あるいは間主観的なものである数学が、直接見ることのできない宇宙構造を解き明かすことができる(場合がある)のか、これは当たり前のことでなく、説明を要求する一つの神秘である。無神論的立場からこんなことは説明できない。ちょうど性相(生物の青写真)と形状(構成素材)が全く別の出自をもつ無縁のものであったとしたら創造はありえないように、我々の認識(科学的・発見的認識)も、主体である人間と、対象である客観的世界が、手前勝手に進化したバラバラの存在であったなら、全く不可能であろう。統一思想の教える緻密な内容をここで紹介することはできないが、「外界の存在形式に対応する心的形式としての思惟形式が心理の中に形成される」のである。「カントが主張したように、思惟形式は存在と無関係な状態にあるのではない。またマルクス主義が主張したように、外界の实在形式が反映して思惟形式となるのではさらにない。人間自身のもとより、外界の存在形式に対応した思惟形式を備えているのである⁽²⁵⁾」要するに、人間の内部に存在するロゴス(数理)は、客観的宇宙に内在しているロゴス(数理)に対応しているのである。

『要綱』は、イギリスのいわゆる「経験論」と大陸の「合理論」がカントによって統合されたと言われる経緯を説明し、カントの先験的「カテゴリー」による「対象構成的」認識論と、マルクス主義の説く客観世界の主観への反映による「反映」認識論を、特に詳しく批判的に解説している。次に引用するのはカント批判の一部であるが、ここから「統一認識論」の輪郭がほぼわかるはずである——

またカントは、主観(主体)の形式と、対象から来る内容が結合することによって、認識がなされると言ったが、統一思想から見れば、主体(人間)も対象(万物)も、内容と形式を共にもっているのである。すなわち主体が備えているのは、カントの言う先天的な形式だけではなくて、内容と形式が統一された予め存在する原型(複合原型)であり、また対象から来るのは、混沌とした感覚の多様ではなくて、存在形式によって秩序付けられている感性的内容なのである。

しかも主体(人間)と対象(万物)は相対的な関係にあって、相似形をなしている。

したがって、主観が対象を構成することによって認識がなされるのではない。主体のもっている「内容と形式」(原型)が、対象のもっている「内容と形式」と授受作用によって照合され、判断されることによって、認識がなされるのである。(傍点引用者)⁽²⁶⁾

予め人間のもっている「原型」が対象との「授受作用によって照合される」という認識の仕方は、カントの「対象構成論」でもマルクス主義の「反映論」でもない「照合論」(英訳では collation)と呼ばれ、これが最も説得力をもつだろう。なぜこのような対応関係(相似性)があるのかといえ、それは宇宙創造が人間を目標としてなされたがゆえに、「人間は万物の総合実体相として、宇宙の縮小体すなわち小宇宙であるため」である。また認識には、単なる「感性的段階」から「悟性的段階」を経て、最も高度な「理性的段階」があり、この最後の段階は、「悟性的段階において得られた知識を資料として、思惟作用によって新しい知識を得る」段階である。これは創造と同じ意味をもつ段階、科学者や芸術家が新境地を切り開く認識の段階であり、アインシュタインやユージーン・ウィグナーの言う、数学によって宇宙の秘密を言い当てる認識段階はこれであろう。

芸術というものも、その本質は、我々が「原型」として予めもっているものを、芸術家が言い当てることによって驚きと感動を喚起するのであり、宗教的覚醒というのも、すでに「原型」として人間の内部に眠っていたものが、何らかのきっかけで突如として発見されることをいう。「求めよ、さらば与えられん」と言うように、求める側と与える側の波長が突如として合って、像を結ぶことがあるのである。

「原型」が「授受作用」を通じて突如、確認されるという認識のからくりについては、メルロー=ポンティも『知覚の現象学』で、人が渚づたいに遠くにある難破船の方へ歩きながら、それを難破船と確認する過程を例にとって説明している⁽²⁷⁾。それは「突然、光景が再組織されて、私の不明瞭だった期待に満足を与える」という形で起こる。「対象の統一性は、ある逼迫した指令の予感のうえに基礎を置いており、これが風景のなかにただ潜在していただだけの質問に、一挙に解答を与えに来る」(傍点引用者)と言っている。難破船の認識は、近づくにつれて徐々に起こるのでなく、突如として起こることである。

科学上の発見にせよ、宗教的「悟り」にせよ、新しい認識が突如として起こることとは、何かを暗示しないだろうか？ マイケル・デントンも、自然界の発展の原則は「飛躍」であって、「徐々に」ということではないと言っている。「自然は飛躍せず」というダーウィンの信じた原則は間違っているということである。統一思想が教えるように、認識の原理と創造の原理が、主体(性相、心)の中の「原型」が、対象(形状、質料)と「授受作用」しながら一体化して新しいものを生むという意味で、本質的に同じだとするなら、その誕生の瞬間は「徐々に」ではなくて「一気に」ということだと思われる。これは、生命起源の謎や、生物種が突如として完全な姿を現す「カンブリア爆発」などの謎に、解決のヒントを与えるものではなかろうか。先にも述べたように、電波の「同調」によって画像や音声は突如として現れるという現象は、単なる比喻以上の意味をもつものではなかろう

か。

認識ということが、普通の健全な生活者にとって問題になることはほとんどない。しかしダーウィニズムや無神論の枠に囚われている学者や知識人は、認識障害を起こすことがある。生命を生命として認識できない（してはいけない）とか、この自然界はデザインされたように見えるだけであるとか、「なだらかな山道」がないにもかかわらず、あるように見える（ドーキンズ）とか、この世界に意味や秩序があると思うのは錯覚で実は無意味なのだ（ワインバーグ）とか、などは明らかに認識障害である。またサルトルのように、あらゆるものがその輪郭と意味とアイデンティティを失って見えるのも、病的な認識障害である。

実は、我々の最も常識的な態度こそ、統一認識論の教えるものにほかならない。つまり、この客観世界はそれ自体が意味や秩序や価値をもっており、それを研究し発見していくのが我々人間で、我々はその能力を与えられている、と考えるのが常識的であろう。この世界はそれ自体では無意味・無価値だから、我々が意味や価値を与えてやるのだ、などとは普通考えないだろう。統一認識論はその常識を教えるものである。つまり我々の常識は、実は神を前提とする有神論的世界観に立っているのである。

ところが我々は、認識がどうして成り立つのかを正面切って問われると、答えることができなかつた。それは認識の根拠がどちら側にあるのか、客観世界にあるのか、それとも我々の主観にあるのか、経験や感覚にあるのか、それとも理性や思惟にあるのか、それがわからなかつたからである。カントが現れてこれを解決したといっても、本当に納得のいくものではなかつた（彼は神を「物自体」として不可知の領域へ追いやった）。そこへ統一思想が現れて、我々の常識をきちんと分析的に説明してくれたのである。すなわち認識の根拠はどちらか一方にあるのでなく、客観世界と主観世界の両方にあるのであり、そのあいだの対話（授受作用）によって現れてくるのが認識（創造的・能動的認識）であること、そしてそれは宇宙創造の動機が、愛の対象としての人間にあったために、世界が人間に合わせて「相似形に」創られているからだということを明らかにしたのである。

こういった解釈は、無神論文化にどっぷり漬かつた現代人には、最初はなじみにくいかもしれない。しかし、こうした考え方を頭から軽蔑して退けるとしたらどうなるか（軽蔑は無神論者の得意技である！）。そのとき我々は、これまで見てきた通り、強引な解釈を世界に押し付けなければならないだけでなく、ニヒリズムのあらゆる混乱、心の病、暴力、絶望、といった悪の泥沼に突き落とされるのである。これを我々は二十世紀の歴史から学んだのではなかつたか？